

書籍紹介

森 洋久 編

『角倉一族とその時代』

角倉研究プロジェクト（同書 p. 6, 615-7 を参照）の成果であり、26名の論考を取録している。同書は単に、商人や事業家などに限らず多様な活動を行っていた吉田・角倉一族の個々の業績を明らかにするというものではない。カバーの折り込みには「文化・技術の総体の中で近世の吉田・角倉一族の業績を俯瞰的に検討」と書かれているが、むしろ、吉田・角倉一族の多様な活動を通して当時のさまざまな文化・技術を総体的に俯瞰しようという野心的な試みであると言えよう。収録されている個々の論考は独立しているので、必要な部分を「つまみ食い」しても十分有益であろうが、通読することをおすすめしたい一冊である。

内容

- 【第一部】 吉田・角倉家の系譜
- 【第二部】 吉田家の医業
- 【第三部】 社会基盤と角倉
- 【第四部】 海外貿易と船の技術
- 【第五部】 算術
- 【第六部】 嵯峨本と古活字

(松村 紀明)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町 355,
TEL. 075 (751) 1781, 2015年7月, A5判, 622
頁, 8,800円+税]

井上幸孝・佐藤 暢 編

『人間と自然環境の世界誌——知の融合への試み (SI Libretto)』

専修大学で行われた公開講座・講義、研究プロジェクトを元にして、人類・文明と自然・環境との関わりをさまざまな視点から描いた新書。歴史学、地球科学、地質学、動物生理学、自然人類学、医史学、フランス文学の研究者による6つの「講」と、この6つを結びつける役割の6つの「トピック」から構成される。第5講は、感染症の流行を国際経済の展開と自然環境の歴史との交錯領域として描いている。その他の「講」「トピック」にも示唆に富む情報が含まれている。

内容

第1講 人類と自然環境のかかわりを考える
井上幸孝・佐藤 暢

はじめに

世界史の限界と新たな挑戦
人類史・文明史の視座と環境

自然科学からより幅広く人類の歴史を見る
方法
人類の歴史と環境
学問分野の垣根を越えた「知」の統合へ向
けて

トピック1 マヤ文明の多様性と自然環境

青山和夫

第2講 高精度環境復元の試み 五反田克也
環境復元と地球の自然環境の変化
古環境を復元する方法
高精度分解能の環境復元への道
年縞堆積物が解き明かす地球の環境変動

トピック2 人類の進化と地球環境 佐藤 暢

第3講 人骨から生老病死を探る 長岡朋人

自然人類学とはなにか
 生物考古学という新領域
 古人骨の研究におけるフィールドワーク
 古人骨を鑑定する
 骨病変を診断する
 古人骨が語る歴史的事件
 古代人の病気との闘い
 古人骨を研究する倫理

第4講 砂漠で生きるラクダにたよる人間の生活

坂田 隆

砂漠はどういうところか
 砂漠で生きのびるためのやりかた
 砂漠のほ乳類代表—ラクダとハムスター
 ゴールデンハムスター
 ハムスターの適応戦略
 西に進出したラクダと南に進出したラクダ
 ラクダと水—水を節約するしくみ
 木の葉を食べて生きぬくラクダ
 ヒトは砂漠にむいているか？
 ヒトの体から出ていく水—尿や汗，体温調節，腎臓から尿に出ていく水
 文化による水の節約—ヒトが作る穴，それは住居と衣服
 砂漠での暮らしをささえるラクダ
 ラクダの利用法—降雨量とラクダ飼育の関係
 おわりに—ラクダを多面的に活用するという文化

トピック3 南米アンデスにおけるラクダ科動物
 鳥塚あゆち

トピック4 誰かの視点から歴史を見るか

—スペイン領アメリカにおける支配者
 と被支配者，征服者と被征服者
 井上幸孝

第5講 モノ・カネ・人そして病原体の移動

—国際経済と疫病の世界史 永島 剛
 「コロンブス交換」とは
 「マルサスの罠」の要因としての疫病
 黒死病
 貿易と防疫
 現代のベスト
 国際社会の課題

トピック5 環境と経営 福原康司

トピック6 中国の宗教思想と自然 土屋昌明

第6講 自然と人間のかかわりあいの狭間で

—芸術作品の中で表現された自然

根岸徹郎

いろいろな「自然」

人間と自然の関係

自然との接し方

自然の上に立つ人間

万物の秘密である「青い鳥」を求める人間

自然の中にいる人間

自然と芸術の表現

霧の向こうの世界

(澤井 直)

[専修大学出版局，〒101-0051 東京都千代田区
 神田神保町3-10-3 (株)専大センチュリー内，
 TEL. 03(3263)4230，2017年3月，新書判，280
 頁，900円+税]

鷹見家文書研究会 著

『蘭学家老 鷹見泉石の来翰を読む—政治篇—』

本書は古河藩家老・鷹見泉石宛に送られた書翰
 の中で政治に関するもの108点の翻刻・解説であ

る(蘭学に関するものは2013年に刊行された『蘭
 学家老鷹見泉石の来翰を読む—蘭学篇—』があ